第一部　彼らかく生き　かく戦えり……009
第二部　戦死者と家族の声……051
日本側
空母赤城 053　空母加賀 062　空母飛龍 101　空母蒼龍 118　重巡三隈 149　重巡筑摩 175　重巡利根 178　駆逐艦朝潮 179　駆逐艦荒潮 182
米国側
ヨークタウン 185　ホーネット 196　エンタプライズ 209　ハマン 217　海兵隊 236　陸軍 259
第三部　戦闘詳報・経過概要（抜粋）……265
凡例 267　経過概要（日本）269　米国側戦闘経過 367　日米航空兵力比較 373　搭乗員名簿（日本）375
第四部　戦死者名簿……383
日本側

空母赤城 385　空母加賀 399　空母飛龍 439　空母蒼龍 459　重巡三隈 494　重巡最上 528　重巡筑摩 533　重巡利根 533　駆逐艦谷風 534　駆逐艦朝潮 535　駆逐艦荒潮 536　駆逐艦嵐 538　駆逐艦風雲 538　給油艦あけぼの丸 539

米国側

〔海軍〕…空母ヨークタウン 541　空母ホーネット 546　空母エンタプライズ 550　駆逐艦ハマン 553　駆逐艦ベナム 558　ミッドウェー基地 559　〔海兵隊〕…ミッドウェー基地 560　空母ホーネット配属 563　〔陸軍〕…ミッドウェー基地 564　ハワイ基地 566

第五部　死者の数値が示すミッドウェー海戦……569

全戦死者および搭乗員 571　士官・下士官・兵の戦死 572　長男もしくはただ一人の子 572　結婚 573　戦死者の年齢 574　戦死者の年齢（グラフ）575　在隊年数 576　在隊年数（グラフ）577　戦死者の学歴 578　兄弟姉妹の数（戦死者をふくむ）579　戦死者中の搭乗員 580　搭乗員の在隊年数 581　搭乗員の戦死と機種 582　日本側空母搭乗員の戦死と機種 583　日本側喪失艦の平時定員

数と戦死数 584　都道府県別戦死者数 585　日本側戦死者の出身地 587　四空母の科別分布 588　科別に見た喪失日本空母の戦死者 589　各艦船・科別戦死数・日本 591　入隊以前の職業と家業（農業）・日本 592　戦死した日 593
付録…死亡年齢別にみた分布・日本、米国　日本・階級別の戦死者分布1・2 595

あとがき……619
ちくま学芸文庫版あとがき……625
解説　『記録　ミッドウェー海戦』を想う（戸高一成）……629

彼らかく生き　かく戦えり

「彼らかく生き　かく戦えり」

一行で書いてしまえば、わたしのやろうとしたことはこの十余の文字につきる。

一九八〇年（昭和五十五年）の初夏、『サンデー毎日』編集部と「ミッドウェー海戦の生と死」を書く約束をした。当初のわたしの構想がきわめてささやかなものであったことは、わたしがいちばんよく知っている。ちょうど『文藝春秋』に「続昭和史のおんな」を連載中であった。書きたいテーマは残っていたが、年内に連載を終りたく、回数が限られてきていた。とくに書いておきたいテーマがあるなかで、何年越しもの『サンデー毎日』連載の約束と微妙にかさなる部分がある。

わたしは『サンデー毎日』への連載テーマをいくつか書き出し、それをもって毎日新聞社へ相談に行った。そのなかに「ミッドウェー海戦」があり、「夫の生還を信ず」もあった。『サンデー毎日』は「ミッドウェー海戦」を選び、その結果、わたしは「夫の生還を信ず」を五十枚の原稿にまとめて『文藝春秋』へわたすことになった。もし『サンデー毎日』が後

者を選んでいたら、応召したまま未帰還の男たちと、その夫の生存を信じて戦後の三十五年を生きてきた妻たちの記録を、一冊の本になる分量だけ連載したはずである。

「ミッドウェー海戦の生と死」を書く仕事は、「夫の生還を信ず」と同じ質と量の仕事としてわたしの頭のなかにあった。途方もない大仕事になるとは夢にも思わず、しかし知らずに踏みこんだ泥沼を抜け出すために、とにかく可能なかぎりの試みと努力をかさねる以外に道はなくなった。

八二年三月に連載の予告を書き、五月十九日に第一回の原稿を入稿。八四年十二月一日、最終原稿を入稿した。この間約二年六カ月、八四年の九月から八五年三月にかけて『滄海よ眠れ』全六巻（毎日新聞社刊）が単行本としてまとまった。

八二年夏、調査の規模から考えてコンピューターの導入が不可欠であると知り、十一月十六日からコンピューターによるシステム化を開始。調査のプロジェクトチームの本隊は昨年一月末日をもって一応解散したが、現在もなお調査は続行、コンピューターはフルに使われている。

二千枚をこえる『滄海よ眠れ』で書き得たのは、日本側戦死者三百十一名、アメリカ側戦死者六十一名で、全戦死者三千四百十八名の一割強に過ぎない。アメリカ側は二割近くを書いているが、日本の場合は一割ほどである。いずれにしても、調査してわかったこと、遺族へのインタビュー、あるいは遺族からのアンケート回答や来信などの多くが、『滄海よ眠れ』

を支える背景となりながら埋もれたままになってしまった。

おそらく、この種の試みはかつてなされたことはなく、他の作戦は別としても「ミッドウェー海戦」に関しては、今後誰もとりくむ人はあらわれないであろうと思う。したがって、「資料」が万人のものとなるべく公刊されることは、いわば権利でもあり義務ともなった。

歴史観や思想の相違にかかわりなく、ここには、数的にとらえられた「戦争のひとつの顔」がある。この数字が示す姿をどのように受けとめ、どのように使われるかは、わたしの主観の及ぶところではない。

歴史を客観的に記録し、あるいは語ることはきわめて困難であり、「絶対的な事実」などは存在し得ないと思った方がいい。しかし、ここに収録した戦死者の全名簿、グラフその他で示した調査結果は、「客観的」といい得るものにもっとも近い内容を示している。

調査の過程でわたしがスタッフにくりかえして言ったことがある。

「まず全戦死者の確認。そして、最終的な区切り目は、生年月日の確認にしましょう。何歳で戦死したのかが判明したら、その戦死者についての調査はひとまず完了したと考えてください」

貪欲な追跡をかさねる一方で、調査の限度を「戦死者の生年月日確定」にしぼる。その程度の冷静さと諦めがなければ、この調査は果知らずの地獄のような性質をもつものであった。

まだ仕事はつづいている。しかし一九八六年三月三十一日をもって、コンピューターのデータ修正作業をひとまずとめた。

『滄海よ眠れ』の補巻の性質をもつこの本は、同時に独立した「第二次世界大戦資料」となるべきものと考える。

日本側は、戦争中の新聞による叙位叙勲名簿を基調として、靖国神社の合祀記録と照合をおこなうことから出発した。各戦友会のもっている戦死者名簿に助けられたところも多い。しかし調査の時点で戦友会のなかった艦もあり、全戦死者の掌握は、わたしたちの独自の仕事となった。だが、あけぼの丸には姓名階級ともに不詳の戦死者があと一名いるのは確実であるし、軍属がさらにふえる可能性もある。三千五十六名というのが現在の最終的戦死者数ではあるが、さらに若干名ふえる可能性のあること、現時点では調査がそこまで及び得なかったことを明らかにしておきたい。『毎日新聞』の全国支局が、遺族を探し出すネットワークの役割を果してくれた。

アメリカ側の戦死者については、すでに完成された戦死者リストがあると信じていた。しかし、米海軍大学校の「戦略及戦術的分析」（"THE BATTLE OF MIDWAY INCLUDING THE ALEUTIAN PHASE, JUNE 3 TO JUNE 14, 1942. STRATEGICAL AND TACTICAL ANALYSIS" Richard W. Bates, Naval War College）によれば、日本側戦死者数二千五百、アメリカは三百七として（about）となっている。

わたしたちの調査結果ではこれより五十五名ふえて三百六十二名となった。このうち海軍は二百七十六名である。なぜ五十五名もの誤差があるのか推測もできない。どの時点からどの時点までの死者をミッドウェー海戦の戦死者とするか、その基準にズレがあり得ることは